次元の破壊者～繋がる世界の絆～

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
次元の破壊者～繋がる世界の絆～

【Ｎコード】
Ｎ９２９７Ｔ

【作者名】
亀鳥虎龍

【あらすじ】
『次元の破壊者』と呼ばれる男に、様々な平行世界が破壊されてしまった。
次元を渡る事を許された巫女・閃可は、幼馴染の真之介と共に選ばれし者達と共に、その野望を阻止するために立ち向かう。

『重要大事』さんの許可を貰い、『次元の破壊者』をアレンジしました。
是非呼んでください。

９月３０日にタイトルを変えました。

第一話：プロローグ（前書き）

序章です。

第一話：プロローグ

「とうとう、この世界も終わりか・・・・・・」

私はそう呟きながら奴に破壊された『世界』をただ見守る事しか出来なかった。

「父ちゃん・・・・・・俺・・・・どうすれば良いんだよ？」

私の友達の真之助をそう言って俯く。

「でも・・・・まだ希望はある！」

そう思いながら私は、鏡に映る七つの世界を見る。

「彼等なら・・・・きっと！」

「じゃあ、俺はこの世界に。」

「気を付けて。」

そして私達は時空を越え、助けを求めた。

僅かな希望に・・・・

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵（前書き）

最初のメインメンバー登場！

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵

「イテテテ・・・・あれ・・・・ココ何処だ？」

右手に幻想を殺す力を宿す少年・上条当麻がそう言った。

辺りは真っ暗と言うより、闇に包まれている。

「とーまー！」

そんな彼のもとへ、『禁書目録』と呼ばれる白い修道服の銀髪シスター・インデックスが駆け寄る。

「インデックス。　もしかしてコレって、魔術絡みか！？」

「それが、分からないんだよ。」

「・・・・インデックスでも分からない現象だって言うのかよ！？」

動揺する上条であったが、突如声が聞こえた。

「何だァ・・・・手当たり次第歩き回ったら、何でオマエに会うンだァ？」

「すっごい再会！　ってミサカはミサカは驚いたり！！」

「ミサカも、ちょっと驚き☆」

『学園都市』最強のレベル５・一方通行（アクセアレータ）と外見年齢十歳前後の少女・

打ち止め（ラストオーダー）、そして彼女を高校生くらいの体格にした少女・番外固体（ミサカワースト）が現れる。

「一方通行に打ち止め、それに・・・番外固体だったな！　お前等、どうして！？」

「どォしたも、こォしたも・・・・目が覚めたらココにいたンだよ。」

「これには本当に驚いたってミサカはミサカはビックリする。」

そして今度は、今度はジャージを来た少年が現れる。

「オイオイ、コリャどういうことだ！？」

「はまづら、少し落ち着いて。」

『アイテム』の構成員・浜面仕上とその恋人の滝壺理后が登場。

「全体が真っ暗だもんだから、色々歩いて見たら、顔見知りに会っちまったよ。」

「どうやら俺達、謎の空間に着ちまったみてぇだな。」

すると、上条に向かって閃光が走ってきた。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」

すぐに右手を構えてその閃光を打ち消す上条。

「何すんだよビリビリ！」

「やっぱりアンタだったのねってビリビリ言うな！」

さらには『常盤台の超電磁砲（レールガン）』の異名を持つレベル５の能力者の第三位・御坂美琴、

「全く、キミとこんな形で再会するとは・・・・」

「お久しぶりです、上条当麻。」

魔術教会『必要悪の教会（ネセサリウス）』の魔術師・ステイル＝マグヌスと神裂火織、

「お久しぶりです！」

天草式十字凄教の魔術師・五和、そして

「いよーう、カミヤンに一方通行、久しぶり～」

陰陽術師の家系の能力者にして、上条のクラスメイト・土御門元春がいた。

「「土御門。」」

「ん？」

因みに土御門は、突如上条＆一方通行に、

「「オラァ！」」

「ガフン！」

顔面ヒットされた。

「な・・・・何するんだにゃー？」

「「いや、何となくムカついた。」」

息ぴったりの二人であった。

そんな上条達の前に五人の人物が現れる。

「オイオイ、こりゃどうなってんだ！？」

霊界探偵・浦飯幽助が上条達の下へ現れる。

「多分、彼等も同じ考えでしょうね。」

赤い髪の青年・蔵馬がそう言い、

「霊力とは違う変わった気があの四人に感じるんだが・・・・」
幽助の同級生・桑原和真がステイル、神裂、五和、土御門を見てそう言った。
「それにしても、ココ真っ暗なのに周りはハッキリ見えるね。」
霊界案内人・ぼたんがそう言った。
「・・・・・・・・・・・・」
黒いコートを着た小柄な男・飛影は沈黙していた。
「なあ、お前等もこの状況に驚いてるのか？」
「え・・・あ、ああ・・・・・・」
幽助に問われた上条は戸惑いながらも素直に答える。
「何か、大変だな・・・・」
「ああ、全くだぜ。」
桑原と浜面は、いつの間にか意気投合し、
「・・・・・・・何だァ、テメェ？」
「・・・・・・・フン、別に。」
一方通行と飛影は、親近憎悪と言うべきか、今にも喧嘩上等という

雰囲気であった。

「やれやれ、誰かムードメーカーと呼ぶべき人物はいないんでしょうか？」

溜め息混じりに苦笑する蔵馬に神裂は、

「大変ですね。」

少し、同情する。

いつの間にか親睦を深めた彼等であったが、

「「「「！！」」」」

浦飯チームの四人は、突然何かを察知した。

「コイツは！」

「妖気！？」

「バカな、どれもS級以上だぞ！」

「しかも凄い数だぜ！！」

四人は戦闘態勢に入って構えるが、すぐに解かれる事になった。

「あれ、やっぱり誰かいる。」

今度は中学生くらいの着物を着た茶髪の少年を先頭に九人の集団が現れた。

それは関東妖怪任侠一家『奴良組』若頭・奴良リクオとその仲間達、そして陰陽師の花開院ゆらであった。

「若、どうしやす？」

「とりあえず、話しをしてみないと・・・・・」

「奴良くん、それホンマにするつもりか？」

そんな彼等の会話を聞いて蔵馬は、

「どうやら、彼等も同じ状況みたいですね。」

そんなこんなで、話しをする事になった彼等であった。

数分後、互いの状況を聞いた三組は、すぐに打ち解けた。

「つまり、ゆらだっけ？　オメェは、『鵺』って妖怪を倒すために、リクオ達と共闘してるってことか？」

「妖怪と手ぇ組むのはしゃーないけど、これも人々を守るためや。――てかアンタ陰陽師で驚かんのか！？」

「いや別に？」

ゆらは、陰陽師の自分に驚かない幽助に逆に驚く。

「俺は土御門が陰陽師って聞いた時は内心信じられなかったけど、ゆらなら納得がいく。」

「確かにな。」

上条と一方通行は、ゆらと土御門を見比べそう言った。

「ちょっと、それは俺がゆらちゃんと比べて、陰陽師ぽくないって言ってるのと同じじゃん！？」

「当たり前だろォ？」

「だってそうだろう？」

そんな会話をしながら歩いていると、リクオが何かを見つける。

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵（後書き）

更なるメンバーが次回に！

第三話：銀髪の侍と謎の女（前書き）

遂にあの人が登場

第三話：銀髪の侍と謎の女

空間の中を歩いていると、リクオが何かを見つけた。

「ねぇ、あれって・・・・」

『ん？』

そこには、銀髪の天然パーマの男、眼鏡を掛けた少年、チャイナ服の少女、同じ黒い制服を着た三人の男の六人が寝ていた。

「・・・・・・・・・」

どうしようかと思ったが、とりあえず起こしてみる。

「お～い、起きろ～。」

幽助がそう言うと、

「誰だ～、変な目覚まし掛けた奴。」

「今八時だろうが！　少しくらい寝かせろバカヤロー！」

「銀さんも神楽ちゃんも五月蝿い。」

寝言で返事する三人。

と言う事なので、

「「「起きろ！」」」
幽助が銀髪を、一方通行が眼鏡を、飛影がチャイナ服を踏み付けた。
「「「んが！？」」」
踏まれてすぐに起きた。
「テンメ！　何しやがんだ！」
「そうアルよ！　折角のお昼寝の邪魔は許せないアルね！」
「そうですよ！　睡眠妨害で訴えますよ！」
「つーか、周りを確認してから寝てたのか？」
「「「へ？」」」
幽助にそう言われた三人は、周りを見渡すと、
「あ、ホントだ。」
「真っ暗アル。　新八、電気何処アルか？」
「いや、どう見てもそう言う状況じゃないでしょ！？　てか何時まで我が家気分！？」
「・・・・・・・気付いてなかったのかよ？」
すると、今度は黒服の三人も起きた。

「何だぁ、随分と騒がしい――」

「へ？」

すると、黒服で黒い髪の男と銀髪の男は、顔を見合わせる。

「「何でテメェがいんだァァァァァァァァァァァァァ！？」」

どうやら顔見知りのようだった。

この六人こそ、万事屋を営んでいる坂田銀時、志村新八、神楽の三人と真選組のトップの近藤勲、土方十四朗、沖田総悟であった。

「やっと目覚めたのね・・・・全く、どれだけ起こしてもピクリとも動かないんだから・・・・」

そう言って艶やかな着物姿の少女が現れた。

「何だオメェ？」

銀時にそう言われた少女は、こう言った。

「貴方達を呼んだものよ？」

「マジで！？」

「マジで。」

さてと、と言って少女は自己紹介をする。

「私の名は閃可（せんか）。　貴方達に頼みがあってココに呼んだの。」

そう言うと、閃可は腰の刀を抜く。

「まずは、腕試しよ。　上条当麻、浦飯幽助、奴良リクオ、坂田銀時！」

「来る！」

「構えとけよ！」

「わーってるわ、ボケ！」

「うん！」

閃可は右手から火球を放つも、

「効くかよこんなモン！」

上条が右手で打ち消した。
それを見た能力者&魔術師メンバー以外は驚きを隠せなかった。
「打ち消した！？」
「弾くのではなく、打ち消すって！？」
「何だあの能力！？」
それを見た閃可は、
「流石は『幻想殺し（イマジンブレイカー）』！」
そのままリクオに刃を向ける。
「少年、受け取れ！」
近藤から刀を受け取ったリクオ。
「ハァ！」
振り下ろされると同時に、リクオに変化が起きた。
ガキィィィン、と刀と刀がぶつかり合う。
しかし、一同が驚いているのは、
「良い腕だな。」

「それがぬらりひょんの血か。」

リクオの体が白い長髪に１７０センチもある長身の青年に変わった事である。

「か・・・・・変わりやがった！？」

「変化か！？」

「性格まで変わってるんだけど・・・・・」

すると閃可は銀時に刀を向ける。

「オラァ！」

すぐに銀時は腰の木刀を抜き取る。

「やるな。」

「どうも。」

そして、すぐに銀時から幽助へ攻撃を仕掛けるも、

「喰らいやがれ！」

幽助が右手の人差し指の先端から妖気を集中させていた。

「レイガァァァァァァァァァン！」

放つのは、十八番の大技・霊丸。

「クッ！」

すぐに霊丸を紙一重でかわす閃可。

浦飯チームのメンバー以外は驚きを隠せなかった。

「な・・・・・何だ、アリャ！？」

「妖気だけでこれほどの威力が出せるなんて！？」

「ハァ・・・・・ハァ・・・・・流石は霊丸・・・・・凄い威力ね。」

「まあな。」

すると、閃可は刀を納めた。

「突然攻撃してゴメンナサイ。　貴方達の力を知りたかったから。」

「で、そこまでやる理由は何だ？」

その問いに閃可はこう言った。

「私が『次元の破壊者』と呼んでいる人物を倒して欲しいの。」

「次元の・・・・破壊者？」

「ええ。」

リクオの発言に閃可は頷く。

「彼は、私の幼馴染の親友で・・・と言っても私と幼馴染はまだ六歳で、その親友は十八歳だけど。」

「・・・・・・随分、齢の離れた親友ですね。」

説明を聞いた神裂は、少し驚く。

「彼は、当時結婚を控えていたの。　でも、彼の婚約者の女性が暴力団の起こした交通事故に遭い、帰らぬ人となった。」

「・・・・・・とても穏やかな話しじゃねェな。」

一歩通行は呟きながらそう言った。

「そして彼は、その悲しみと憎しみが暴走し、幾つもの異世界を破壊しようとしてるのよ。」

「ソイツが『次元の破壊者』ってことか？」

「・・・・ええ。」

閃可はさらに話しを続けた。

「そして、私は彼に対抗するべく、幼馴染と共に選ばれた異世界の住人に協力をして欲しいと考えたの。」

「それが、俺達ってことか？」

「そう言う事よ。」

「しかし、何故そこまでして彼は異世界を壊そうと？」

蔵馬の質問に閃可はこう言った。

「世界には、必ず『理』という物が存在するの。」

「まさか、ソイツの目的って！？」

「そう・・・・死んだ婚約者を生き返らせる『理』を得るためよ。」

その言葉で、全員が驚愕した。

全ての話しを終えた閃可は、頭を下げた。

「お願い！　これ以上、世界を壊されたくないの！　力を貸して！！」

それを聞いた上条は、

「頭、上げろよ。」

「え・・・・・。」

「俺達が呼ばれた理由が分かった。　だったら、ソイツの幻想をブチ殺してやるよ！」

右手の拳を握りながらそう言った。

「面白ぇ、やってやろうじゃねぇか。　ソイツのイカレたツラぁ、ぶっ飛ばしてやるよ。」

幽助がそう言って右手の拳を左手の掌にぶつける。

「俺も、全ての『畏』をぶつけて、完膚なきまでに叩き潰してやるよ。」

リクオがそう言って腕を組む。

「しゃぁねぇな、やってやるよ。」

そう言って銀時は頭を掻く。

「有難う！　それじゃあ、今から私の幼馴染が呼んだ異世界の住民の代表者について説明するわ。」

第四話：マフィアの世界と魔導師の世界と死神の世界（前書き）

説明が始まります

第四話：マフィアの世界と魔導師の世界と死神の世界

閃可は突如、後ろの背景を大きなスクリーンにして映像を見せる。

「な、何だこりゃ！？」

「七つの地球！？」

驚く幽助と桑原に彼女はこう言った。

「この七つの内、貴方達の住んでいた世界、私はそれをこう呼んでいるの。　まず幽助達の世界は『霊界探偵の世界』、リクオ達の世界は『百鬼夜行の世界』、上条達は『科学と魔術の世界』、そして銀さん達は『侍の世界』ってね。」

そう言った閃可は、一つ目の世界の代表者を紹介する。

「まずは、この世界よ。　この世界では、並盛町と呼ばれる街に住むこの少年なんだけど・・・」

するとそこには、重力を無視したようなツンツン頭の少年が必死に走っていた。

「彼の名は沢田綱吉。　勉強も運動も全くダメな少年で、通称は『ダメツナ』なんだけど、実は彼は先祖代々から続くマフィア『ボンゴレファミリー』の十代目ボスなの。」

「ま・・・・マフィアって、あの洋画に出てくる麻薬とかを売ってるあのマフィアか！？」

「幽助の言ってることは過剰だけど・・・・・彼には、自身の所有し、家庭教師であるアルコバナーレ・リボーンが放つ弾丸に使われる丸薬『死ぬ気丸』を使うことで、ハイパー化と呼ばれる姿と化すことが出来るの。　その映像がこれ。」

するとそこには、額にオレンジ色の炎を宿したさっきとは別人のツナが映っていた。

「さ・・・さっきのガキとは思えねぇ雰囲気だぜ・・・・・。」

「それだけじゃない、グローブの炎の噴出で空を飛んでいる。」

「そんな彼にはこんな技があるのよ。」

閃可がそう言うと、そこにはグローブから発する炎を相手にぶつかるツナの映像を見て驚愕する。

「この技は、彼の武器『Ｘグローブ』を使った『ＸＢＵＲＮＥＲ（イクスバーナー）』と呼ばれる技で、幽助の霊丸に匹敵する威力よ。」

「マジで！　スゲー！！」

驚くどころか、ワクワクする幽助に上条達はこう思った。

「（バトルマニアかよ！？）」

またリクオにいたっては、

「（こいつも俺と同じ境遇を持ってるってことか・・・・・）」

自分と同じ境遇を持つツナに共感を持った。

「私はこの世界を『マフィアの世界』と呼んでいるわ。」

次に閃可は、『マフィアの世界』の説明を終えた後、次の世界の説明をする。

「次は、この世界。　この世界は『ミッドチルダ』と呼ばれ、魔法が盛んになっていて、銃器などの物理兵器の使用を禁止している。」

「ん？　魔法って・・・・ステイルや神裂達が使う魔術と違うものなのか？」

上条がそう言うと、閃可はこう答えた。

「まあ、名前だけが違うだけで、殆どが似たようなものかな。　因みに私が紹介したいのはこの人物。」

映像には、杖を持って空を飛んでいる白い服に栗色の髪の女性の姿があった。

「さっきのツナって奴みたいに飛んでるぞ！」

驚く桑原であったが、御坂がこんな事を言った。

「魔法に、女性って・・・もしかして『魔法少女』！？」

それを聞いた銀時はこう言った。

「おいおい、そりゃアニメの観過ぎじゃねぇか？」

「いや、彼女は立派な魔法少女よ。」

それを聞いた銀時は古典的なこけ方をしてしまった。

「彼女名は高町なのは、２３歳。　ミッドチルダにある組織『時空管理局』の武装部隊所属にして、戦技指導官を務める女性で、『エースオブエース』の異名を持つ。　因みに怒らせると怖い。」

「スゲェな、んじゃコイツにも必殺技ってあんのか？」

期待する幽助に閃可はコレよ、と映像を見せた。

そこには、砲撃を撃ち込んだなのはの姿だった。

「スゲェ！　何だあの技！！」

「『ディバインバスター』・・・高町なのはの使う杖形デバイス『レイジングハート』のシューティングモードから放たれる技よ。」

「スゲーな！　俺の霊丸とガチで勝負してぇ！」

闘争心を昂ぶらせる幽助に、殆どがドン引きし、浦飯チームのメンバーは呆れてしまう。

「私はこの世界を『魔導師の世界』と呼んでいるわ。」

最後に閃可は、『魔導師の世界』の次にある世界の映像を見せた。

「この世界では、異形の姿と化した悪霊『虚(ホロウ)』から死神が人々を守るために戦っている世界なの。」

「待てェェェェェェェェい！　死神って、黒いフードに大鎌を持った骸骨の事だろ！？」

「それは人間のイメージよ。　本来死神というのは、死した魂を導く存在なのよ。　『黒いフードに大鎌を持った骸骨』っていうのは、人の恐怖心の産物よ。　因みにこの世界の死神は、黒い着物の侍の姿をしてるのよ。」

銀時の素朴な問いを一蹴するように答えた閃可は、ある人物の映像を見せる。

そこには、黒い着物を纏い、巨大な出刃包丁のような刀を構えるオレンジ色の髪の少年がいた。

「彼の名は黒崎一護。　霊力が強いのを除けば、普通の高校生だったけど、家族を虚に襲われた際に、死神・朽木ルキアから死神の力を貰い、それ以降戦いの世界に足を踏み入れてるわ。」

「“一つの大切なものを護る”から一護か・・・・・良い名ですね。」

一護の説明を聞いた神裂は、彼の名前に敬意を表した。

「因みに彼には、こんな事が出来るのよ。」

そう言って閃可は、次の映像を見せた。

そこには、漆黒のコートのような着物を纏い、細長い刀身の『卍』型の鍔と柄尻に途切れた鎖の着いた全てが黒い日本刀を持った一護の姿であった。

「コレの名は『卍解』と呼ばれるもので、死神の刀『斬魄刀』の強化形態と呼べるもので、最初の『始解』から十年分の修行を経て発動させる事が出来るものよ。」

「マジすげぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

『卍解』の説明を聞いた幽助は、感激のあまりに絶叫する。

「そして、これが彼の必殺技。」

そう言うと閃可は、一護が斬魄刀『斬月』から巨大な斬撃を放つ映像を見せる。

「これは一護の必殺技で、名前を『月牙天衝』と呼ぶわ。」

「ホントにスゲェな！　早くアイツらに会わせてくれよ！」

期待が高まる幽助に閃可はこう言った。

「それじゃあ、説明も終わったし、今から貴方達に彼等の情報を頭の中に入れておくわ。」

「そんな事、可能なのか？」

「勿論、それじゃあ、目を瞑っといて。」

そう言われ全員は、目を瞑りながら三つの世界の情報を閃可から得たのである。

「しかしスゲェな、アイツ等相当な場数を踏んでやがるよ。」

「それじゃ、これから私の知り合いのいる世界に行くわよ。」

第五話：部屋分けと模擬戦の対戦カード

四組が着くと、そこには大きな屋敷が立っていた。

「デケェなぁ、これオマエの家か閃可？」

「一応は、知り合いから借りてるといえば良いかしら。」

銀時の問いに閃可はサラッと答える。

ドアを開けると、そこには広すぎると言っても可笑しくないリビングがあった。

「かぁ～、広すぎんぜ！」

「マジかよ、これ俺等が使って良いのかよ！？」

驚く幽助と桑原であるが、

「良いのよ。　困った時はお互い様だから。」

閃可はサラッとそう言った。

「それじゃあ、部屋分を行いたいんだけど良いかしら？」

「俺は構わないぜ？」

「俺も眠れるトコなら何処でも良いぞ。」

「俺も構わないけど。」

「僕も同じです。」

「じゃあ、こうしたんだけど。」

閃可は、何処からか持って来たホワイトボードに張られた張り紙を見せる。

そこには、こう記されていた。

・ルームナンバー1
奴良リクオ
上条当麻
浦飯幽助
坂田銀時

・ルームナンバー2
青田坊
神楽

河童

・ルームナンバー3

近藤勲

沖田総悟

黒田坊

・ルームナンバー4

神裂火織

五和

毛倡妓

・ルームナンバー5

志村新八

首無

桑原和真

・ルームナンバー6

御坂美琴

番外固体（ミサカワースト）

氷麗

・ルームナンバー7

浜面仕上

滝壺理后

・ルームナンバー8
花開院ゆら
蔵馬
土御門元春
・ルームナンバー9
一方通行（アクセラレータ）
飛影
・ルームナンバー10
インデックス
打ち止め（ラストオーダー）

・ルームナンバー１１
鴆
ぼたん

・ルームナンバー１２（喫煙室）
ステイル＝マグヌス
土方十四朗

「まあ、こんなトコかしら。　じゃあ、あとは好きにして。」
そう言って、閃可は台所に向かった。

それぞれ指定された部屋に入った十二組は、その部屋の広さに驚きを隠せなかった。

「スゲェ！　広すぎるぜ！！」

「マジで！　コレ使って良いの！？」

「広すぎるにも問題があるような・・・・」

「まあ、良いじゃないですか？」

等の感想が漏れた。

因みにステイル・土方ペアの部屋はというと、

「オイィィィィィィ！　ココもしかして、喫煙所か！？」

「まあ、嬉しい気遣いといえば嬉しいが・・・・」

自分達の部屋が喫煙室である事に内心喜んでいた。

数時間後、部屋の内通電話で閃可に呼び出された一同は、彼女が作った料理を食べながら親睦を深め合った。

翌朝、全員が広間に集められ、閃可からこんな事を告げられた。

「模擬戦？」

「ええ、別世界の能力（チカラ）を肌で感じてもらおうということよ。」

幽助の疑問に即答で返した。

「確かにそれは、良い案ですね。」

「そんじゃ、対戦カードを組み込んでおいたわよ。」

そう言って背後のモニターに映像が映し出された。

そこには、神裂と首無の写真が映し出された。

「第一回戦、神裂火織ｖｓ首無。」

「え！？」

「成る程、ランダムというワケではなさそうだな。」

神裂は、イキナリの出来事に驚き、首無は閃可の思考に納得しがちであった。

「次に第二回戦、土方十四朗ＶＳ黒田坊。第三回戦は御坂美琴ＶＳ河童。」

「拙僧は、土方殿か。」

「ああ、宜しく頼むぜ。」

「え、私が！？」

「へぇ～、オイラが？」

驚く御坂とは対照的に、河童はマイペースであった。

一方の土方と黒田坊は、互いに一礼をする。

「第四回戦は一方通行（アクセアレータ）ＶＳ飛影。。」

「ほう・・・・ソイツは楽しめそうだな。」

「面白ェ、やってやるぜ。」

一方通行と飛影は、互いに対戦相手を睨みながら闘争心の炎を密かに燃やす。

そしてモニターには、二組の写真が映った。

「最後に第五回戦、坂田銀時ＶＳ奴良リクオ。　そして第六回戦、浦飯幽助ＶＳ上条当麻。」

「え～と、僕が坂田さんと？」

「みてぇだな、宜しく頼むぜ。　それとそんな堅苦しくしなくても銀さんで良いぞ。　」

「じゃあ、宜しくお願いします銀さん。」

「そんじゃ、宜しくな上条。」

「ああ、宜しく。」

そう言って二組は、互いに相手の顔を見合わせた。

第六話：鋼線ＶＳ紐～女教皇～（前書き）

神裂ＶＳ首無、開始。

第六話：鋼線ＶＳ紐～女教皇～

「んじゃ、これから私が作った『超幻覚』のフィールドに行って貰うわよ。」

「オメェ、一体ナニモンだよ？」

六つのフィールドが用意され、模擬戦をするメンバーは、指定されたフィールドに向かった。

残りのメンバーは、モニターからその様子を観戦する。

「それじゃあ、試合開始！」

遂に次元を超えた戦いが始まった。

―鋼線ＶＳ紐～教皇女～―

第６フィールド・・・砂のフィールドでは、神裂と首無が戦闘態勢に入った。

「必要悪の教会所属（ネセサリウス）・神裂火織、参ります。」

「奴良組本家所属・首無、何時でも。」

すると神裂は、愛刀の『七天七刀』の柄を右手に持ち、鞘を左手に持つ。

「『七閃』。」

そして技名と共に、刀を抜くと同時に地面が裂けた。

「！？」

驚く首無は、すぐさま間合いを取る。

「（今のは、斬撃！？　しかし、あの刀の長さで遠くの対象を斬れるのか！？）」

全長二メートルもある『七天七刀』を見ながら首無は、神裂の戦い方を分析する。

「（『七閃』に気付き、即座に間合いを取るとは、どうやらこの勝負、簡単には終われないようですね。）」

神裂も首無の行動を見ながら、次の策を練る。

「（落ち着け、あの長い刀で高速の抜刀は不可能だ！　何か、何か

秘密がある筈だ。）」

そう思い首無は、神裂の周囲を確認する。

すると、彼女の周りに、僅かに糸のような物が見えた。

「成る程、鋼線術を使った高速斬撃だね。　抜刀はあくまでワイヤーを隠すためのフェイクということかい？」

そう言って首無は紐を両手に持って構える。

「（まさか、『七閃』の正体にすぐに気付くとは・・・・あの青年、決して甘くないと思っていましたが、これ程とは・・・・・）」

首無の予想以上の分析力に内心驚く神裂。

モニターから戦いを観戦する五和と鴆は、互いに驚きを隠せなかった。

「オイオイあの姉ちゃん、トンでもねぇ代物隠してたのかよ！？」

「凄い・・・女教皇(プリエステル)様と互角の勝負をするなんて。」

女教皇(プリエステル)様とは、当時天草式のトップだった頃の神裂の異名で、現在でも天草式では彼女の事をこの呼び名で呼んでいる。

「しかし、首無さんの戦いって、一体どんな戦法なんですか？」

疑問に思う五和に、鴆はニヤリと笑いながらこう言った。

「そりゃ、トビっきりスゲーもんだぜ。」

ステージ内では、神裂と首無の戦いが続いていた。

その時首無は、彼女にこんな事を聞いた。

「ところで、一つ聞いて良いかな？」

「何ですか？」

「さっき土御門氏がキミに“模擬戦に負けたらメイド服を着て貰う

”って言ってたのが聞こえてたんだけど、僕に負けた場合、本気で着る気かい？」

「な！？　ななななななななななぁぁぁぁぁぁぁ！？／／／／」

それを聞いた途端、神裂は一気に顔が赤くなってしまった。

「（図星だったんだ。）」

そう思いながら首無は溜め息をつく。

逆に神裂は、途轍もなく慌てていた。

「（がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　よりによって模擬戦の対戦相手に知られてしまうなんてぇぇぇぇぇぇぇぇ！！）」

そんな彼女に首無は、ゴホンと咳払いをしてこう言った。

「え～と・・・・まあ、そこはひとまず置いといて。」

「置かないで下さい！！」

もう、逆ギレに近い返事をする神裂に首無はこう言った。

「見せてあげるよ。　僕の・・・・いや、我々『奴良組』の戦いを。」

遂に、首無の本領が発揮される。

モニターから戦いを観ていた土御門はニヤニヤ笑いながらこう言った。

「フフフフ・・・・“ねーちんのメイド姿を拝みたい”と銀ちゃんとゴリチンがワクワクしてるから待ってなよねーちん。」

そんな彼の右手には、メイド服が握られていた。

「ねーちんが負けた証には、この『堕天使エロメイド』の衣装を着て貰うにゃー！」

ワクワクする顔でそんな事を言い出す土御門であるが、左手にはセーラー服を持っていた。

「いや、どうせならセーラー服も着せた方が・・・・・」

そしたら、今度は近藤がこう言った。

「先生、どうせなら俺はバニーガールが良いです。」

そう言ってバニーガールの衣装を手にしていた。

「そんな場合じゃねぇだろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

二人のマニアックなボケにツッコミを入れる新八であったが、

「私も着ようかな・・・・『大精霊チラメイド』。／／／／／」

「何でそうなんの！？」

本気でそんな事を考える五和に、さらにツッコミを入れたのであった。

第六話：鋼線VS紐～女教皇～（後書き）

ステイル
「・・・・彼、ツッコミ以外は何か頼りになさそうなんだけど。」

神楽
「仕方無いアル、新八のスキルはツッコミだけアル。　それを否定したら新八はタダの眼鏡アルよ。」

ステイル
「キミ、何気に酷いね。」

第七話：鋼線ＶＳ紐～弦殺師～（前書き）

遂に首無が、本領発揮です

第七話：鋼線ＶＳ紐～弦殺師～

紐を構え、戦闘態勢に入る首無。

「行くぞ。」

「（一体・・・・・どんな攻撃を！？）」

様子を窺いながら、『七天七刀』を構える神裂。

“常州の弦殺師”首無・・・それが昔の僕の呼び名さ。」

遂に第６ステージの対決に決着が着く。

～鋼線ＶＳ紐～弦殺師～～

「（『畏（おそれ）』・・・・・発動！）」

突如、首無の体から何かを感じ取った神裂は、すぐさま体勢を立て直す。

「（来る！！）」

すると首無は、フィールドの砂を紐で巻き上げ、砂煙の煙幕を作った。

「目暗ましか！？」

そう思った神裂は刀を構え、慎重に様子を見る。

すると煙幕から、首無が跳び上がって来た。

「！！」

自身の後ろに着地した首無へ、すぐさま振り向く神裂であったが、

「貰った！」

しかし首無には胴体があっても、頭部が無かった。

「な！？」

驚く神裂であったが、後ろから突如声が聞こえた。

「『抜け首』とは、『轆轤首』の一種で、頭が胴体から離れて活動する妖怪だ。」

振り返るとそこには、首無の頭部が浮かんでいた。

「僕はその『抜け首』の一人でね。」

「（頭と胴体で別個だったとは！）」

首無の妖怪ならではの変則的な戦いに悪戦苦闘する神裂。

「クッ・・・このままじゃ・・・・・」

一端退こうと、後ずさりする神裂であったが、

「喰らえ・・・・・」

突如彼女の足元から、首無の紐が螺旋状に砂の中から出現した。

「しまった！（まさかさっきの砂煙は、目暗ましではなくこれを隠すための囮！？）」

神裂が気が付いたときには、既に遅かった。

「『殺取（あやとり）“螺旋刃（らせんじん）”』！！」

首無の紐が渦を巻くように、神裂の体を命中させた。

「が・・・・・は・・・・」

「これが、奴良組の戦いさ。」

モニターから観ていた魔術サイドメンバーは、驚きを隠せなかった。

「ば・・・莫迦な！　神裂が！？」

同僚の敗北と相手のトリッキーな戦法に、驚愕するステイル。

「驚くことじゃねぇよ。　大体首無自身も、あの姉ちゃんが掛かったのが偶然みてぇなもんだぜ？」

鴆がフォローするようにそう言った。

「しかし、あの短時間で策を練るなんて出来るもんなのかね？」

「近くの物や手元の道具も、使い方次第では立派な武器ですからね。」

「まあ、確かにそうだな・・・・」

疑問に思うぼたんに、蔵馬が答えると、浜面も納得する。

一方フィールドでは、

「ハァ・・・・ハァ・・・・・・」

首無の策にはまり、大ダメージを受けた神裂。

「クッ・・・・・・！」

立ち上がろうとするも、首無の紐が襲い掛かり、そのまま彼女を縛り上げる。

「な！？」

縛られた神裂は、再び地面に叩きつけられる。

「が・・・・はっ・・・・・」

「もう止めなよ、女性を縛るのは好きじゃない」

そう言って首無が彼女の顔を見下ろす。

何とか抜け出そうとする神裂であったが、その瞬間だった。

ミシミシ、と紐が徐々に締め上げてきたのだ。

「な！？」

「無駄だよ。　その紐は捕縛癖のある女郎蜘蛛と、好きなったら絶対に離さない毛倡妓の髪を編みこんであるんだ。　暴れれば暴れる程徐々に締め上げる。」

自身の武器の説明をする首無に、神裂は抵抗できなかった。

「どうする、ギブアップするかい？　続行すならそれでも構わないけど？」

首無の問いに、神裂はこう言った。

「いえ・・・・私の負けです。」

「そうか、素直で助かったよ。」

模擬戦・第６フィールド・・・結果は、圧倒的な実力で、神裂を追い込んだ首無の勝利。

ギブアップを聞いた首無は、すぐに紐を解いた。

「中々、良い勝負でした。　お陰で良い教訓を得ました。」

「いや、僕も良い勝負が出来て良かったよ。　ところで良いのかい？」

「はい？」

キョトンとする神裂に、首無はこう言った。

「彼との罰ゲーム・・・本当に受けるのかい？」

それを聞いた神裂は、顔を真っ赤にして絶叫した。

「そうだったアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

第八話：侍ｖｓ僧侶～暗殺破戒僧～

モニターから二人の戦いを観る一同。

「土方さんの試合か・・・・・さて、どうでるんでしょうか？」

新八が疑問に思うも、横から沖田の声が聞こえた。

「イケェェェェ、笠坊主の旦那ァァァァァァァ！　土方をぶっ潰すせェェェェェェェ！！」

「アンタどんだけ土方さん嫌ってんだよ！！」

応援内容についツッコミを入れる新八であった。

―侍ｖｓ僧侶～鬼の副長～―

第５のフィールド・・・森のフィールドでは、土方と黒田坊が立

っていた。

が、突如土方が背筋に悪寒を感じ取った。

「！！」

「ん、どうした？」

「い・・・・・いや、何も・・・・・・（何か変な悪寒が！？）」

「風邪ではないのか？　だとすれば無理はせぬ方が良いぞ」

「安心しろ、コイツは武者震いだ！」

「そうか、なら此方も手加減は無用！」

「真選組副長・土方十四朗、参る！」

「奴良組本家所属兼特攻隊長・黒田坊、参る！」

“鬼の副長”と呼ばれし真選組の？2と、“奴良組特攻隊長”と呼ばれし破戒僧の戦いが、遂に始まった。

モニターから観ていた近藤は、一瞬ある疑問を投げつけた。
「ん、待てよ？　黒田坊殿は僧侶なのに戦いに人を武器を抜けても良かったっけ？」
「近藤さ～ん、いい歳こいて破戒僧を知らないんですかい？」
すると沖田が信じられないという顔でそう言った。
「破戒僧？　名にアルか新八？」
「破戒僧って言うのはね、肉食や不殺生などの仏の道を踏み外してもそれを恥じないお坊さんの事だよ。」
神楽も気になっていたが、新八が説明をして教えていた。

フィールド内では、土方と黒田坊が激突していた。
「ウオオオォォォォォォォォォォ！！」

「ハァァァァ！！」

互いの武器をぶつけ合う二人。

「良いぜ黒田坊！　その武術、ウチの真選組に欲しいくらいの人材だぜ！！」

「フッ、悪いが拙僧には、奴良組という組織がある。　折角の誘いはお断りさせて貰うぞ。」

「そりゃ残念だぜ。」

会話をしながら間合いを取る二人。

「ウオォォォォォォォォォォォ！！」

そして土方が迫ってくると黒田坊は、袖を掴むように右手を前へ向けた。

「行くぞ、土方殿！　『暗器“黒演舞”』！」

次の瞬間、黒田坊の袖から、無数の武器が飛び出してきた。

「何！？」

驚く土方は、すぐさまガードするが、全て受け切れず、そのまま吹き飛んでしまう。

「ガァァァァ！！」

後ろの木にぶつかり、ズルリと倒れる土方に黒田坊はこう言った。

「スマンな土方殿。　卑怯だと思うならそう思っても構わん。　これが、“暗殺破戒僧”黒田坊の戦い方なのでね。」

モニターでその光景を観ていた新八。

「う・・・嘘！　これって流石にずるいんじゃ！？」

「いや、新八君。　戦いに卑怯という言葉は無い。　あるのは、命の有無だけだ。　だからアレも、立派な戦術の一つなのだよ。」

驚く新八であるが、近藤の珍しく侍らしい台詞に反論できなかった。

「って作者ァァァァァ！　珍しくってなんだよ！？」

「確かに、近藤さんがそんな侍らしい台詞を吐くのってありませんからね。」

「新八くんまで！？」

折角カッコよく言ったのに何だかバカにされた近藤であった。

一方のフィールドでは、

「ヘッ・・・・やるじゃねぇか・・・・これくらいやって貰わねぇと、面白くねぇからな。」

そう言って立ち上がる土方に驚く黒田坊。

「驚いたな。　まだ動けるとは！？」

そんな彼に土方はこう言った。

「例えどんな奴が相手だろうと、負けるわけにはいかねぇんだよ。
来いよ、本物の喧嘩、見せてやる。」

第八話：侍ｖｓ僧侶～暗殺破戒僧～（後書き）

沖田
「チッ、土方め。　アレで死なねぇか。」

新八
「アンタ、どんだけ腹ん中真っ黒だよ！？」

ステイル
「ホントに彼、応援する気あるのかい？」

神楽
「絶対ないアルな。」

第九話：侍ｖｓ僧侶～鬼の副長～（前書き）

グダグダな上に、短いです。

第九話：侍ｖｓ僧侶～鬼の副長～

「本物の喧嘩・・・か・・・・面白い！　行くぞ！！」

遂に二人の戦いに、決着が着く。

―侍ｖｓ僧侶～鬼の副長～―

最初に仕掛ける土方。

しかしその斬撃には、更なる重みがあった。

「グッ！！」

「まだまだぁ！！」

その猛攻に反撃が出来ない黒田坊。

「そこだァァァァァァ！」

そのまま土方は、強烈な突きを放った。

「グアッ！」

攻撃を受けた黒田坊であったが、すぐさま体勢を戻し、反撃に入る。

「『暗器・黒演舞』！！」

再び技を放つも、

「しゃらくせェェェェェェェ！！」

土方は、そのまま正面から飛び込んだのである。

「な！？」

これには黒田坊本人も驚きを隠せなかった。

「ウオォォォォォォォォォォォォ！！」

そして、渾身の一撃で見事黒田坊を倒した土方であった。

その様子を見ていた奴良組メンバーは驚きを隠せなかった。

「アイツ・・・黒を倒しやがった！」

「凄い！！」

「やはりこの勝負は、トシの勝ちみたいだな。」

そんな彼等とは違い、近藤は土方の勝ちを誰よりも信じていた。

因みに、沖田の場合は、

「チッ、土方め、死ななかったか。」

本気でそう言っていた。

第九話：侍ｖｓ僧侶～鬼の副長～（後書き）

新八
「作者アアアアアアア！　いくら何でもこれは短すぎだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

第十話：電気と水（前書き）

御坂ＶＳ河童です。

第十話：電気と水

第４のフィールド・・・水のフィールドでは、御坂美琴と河童が位置についていた。

「行くわよ、私の実力・・・見せてあげる！」

体から電気を発しながら戦闘準備万端の御坂に対し、

「フゥ・・・水が無けりゃ、絶対負けると思ってたけど、水場が戦場ならイケるかな？」

マイペースに河童はそう言った。

～電気と水～

「行っけェェェェェェェェェェェェ！！」

電撃の槍を放つ御坂。

「ホイ。」

河童は水で作り上げた壁を盾の様にし、攻撃をガードする。

「な！？」

「“水場だから、電気を通せば勝てる”と思ったかい？」

驚く御坂に対し、河童は普段と変わらないペースでそう言った。

モニターでその様子を見ていた五和と新八。

「電気と水・・・・若干一方的に勝敗が決まるようで違うものなのですね。」

「確かに、水使い＝電気に弱いワケじゃないし、電気使いが水を被ったら、電気が使えなくなりますからね。」

「それにしても・・・・河童の皿って、あんな卵の殻みたいな形だったアルか？」

最後にどうでも良い疑問をぶつけた神楽であった。

得意の電気が通用しないことに動揺を隠せない御坂。

そんな彼女に河童はこう言った。

「さっき実力を見せるって言ったよね？　オイラも本気で行くから、そっちも本気で来なよ。」

それを聞いた御坂は、一瞬ニヤリと笑い出す。

「フッ・・・・良いわ、私の本気を・・・見せてあげる！」

そしてスカートのポケットからゲームセンターのコインを取り出し、

「これが・・・私の切り札・・・・」

一度指で弾いた後、

「『超電磁砲（レールガン）』よ！」

それに磁力で河童に向けて飛ばした。

その速度は、通常の３倍である。

「ぶっち貫けェェェェェェェェ！！」

「おっと！」

それを見た河童も、すぐに回避した。

モニターからその様子を見て、

「えぇぇぇぇぇぇ！　御坂さん何かスゲェ技だした！？」

「カッケーなぁ・・・私もやりたいヨ。」

驚く新八とは逆に、羨ましがる神楽であった。

「電気によって生み出した磁力で、コインをあそこまで・・・・・」

蔵馬も新八程ではなかったが、『超電磁砲（レールガン）』には驚いていた。

そんな二人は、まだ戦いが終わっていなかった。

「さあて、次で決めるわよ！」

そう言って御坂が2発目の『超電磁砲（レールガン）』を撃とうとするが、

「やっと完成した。」

そう言って河童の頭上には、巨大な水の球体が出現した。

「え！？」

これには御坂も驚愕する。

「河童忍法秘伝・・・・」

「ちょ・・・ちょっと！？」

「『ミズチ球』！」

「ギャァァァァァァァァ！！」

見事に巨大な『ミズチ球』を喰らい、水浸しになってしまった御坂。

「ま・・・負けた・・・・・」

「あ～楽しかった。」

勝負は最後までマイペースな河童であった。

第十話：電気と水（後書き）

次回、怪物と怪物がぶつかり合う！！

第十一話：怪物同士（前書き）

白と黒の対決が始まります。

第十一話：怪物同士

第４のフィールド・・・街のフィールドでは、一方通行（アクセアレータ）と飛影が立っていた。

「テメェとは、何時かはこォなるとは思ってたけどなァ・・・まさかこンなに早くなるたァ、驚きだぜ。」

「それは同感だ。」

「そんじゃァ・・・」

「手加減無しの・・・・」

「「勝負だ！！」」

こうして、『白い怪物』と『黒の邪眼師』の戦いが始まった。

―怪物同士―

「オラァ！」

一方通行は、電極のスイッチを切り替え、ベクトルを操作した足で真っ向から跳び込み、右手で思いっきり殴りつける。

それを見た飛影は、回避した後、得意の剣技を振るいだす。

「ハァ！」

「甘ェ！」

しかし一方通行は、『反射』を使い、攻撃を防御する。

「チッ！」

弾かれた飛影であったが、すぐさま後ろに退き、体勢を立て直す。

「やるな・・・・・」

「お互いにな。」

モニターを通してその様子を観ていた他のメンバーは、驚きを隠せなかった。

すると、首無と神裂、御坂と河童が戻ってきたが、

「く・・・・まさか・・・・こんな屈辱を味わうとは・・・・・／／／／／」

「何で私も着なきゃならないのよ・・・・・・／／／／／／」

神裂と御坂に限っては、かなりエロいメイド服を着ていた。

「なかなか良いだろう？　『堕天使エロメイド』に『小悪魔フリメイド』、そして『大精霊チラメイド』！！」

そう言って何故か着替えていた五和を見せる土御門。

「「っておい！」」

すぐさまツッコミを入れた二人であった。

「――で・・・・勝負の方は？」

河童にそう言われ、モニターを観る四人。

「す・・・・凄い・・・・あの一方通行と・・・・互角！？」

「最強のレベル５・・・・コレほどの実力とは・・・・・」

「そンじゃァ・・・・次で終わりにしてやるよ！」

その瞬間、一方通行が踏み付けを行った瞬間、アスファルトの道路にヒビが入り、そのまま地割れを起こした。

「！！」

その攻撃に飛影はすぐさま電灯へ移動するも、周りのビルの窓が地割れの影響でガラスが雨のように割れ、降り注いだのだった。

「チッ！」

飛影はすぐに回避しようとしたが、まさにその時であった。

「アハハハハ、ワザワザ的になってくれてどうもアリガト。」

そう言って一方通行が四つの竜巻を背中に接続し、飛影に目掛けて飛んで来たのだった。

その姿は、まるで天使であった。

堕ちるところまで堕ちた天使が、翼を広げ、牙を向けて来たように。

「オラァ！」

ベクトルを操作された拳が、見事に飛影の顔面にヒットし、ビルを突き抜けるように吹き飛んだ。

「クッ！」

「何だァ？　こンなモンかァ！？　もう少し本気だせよ！！」

「・・・・・・・・・・」

それを聞いた飛影は、額の鉢巻を取り外した。

その額には、第三の眼『邪眼』が大きく瞼を開けた。

「良いぜ・・・・やってやる・・・・・・・」

「オイオイ飛影の奴、まさかアレを使うんじゃねぇだろうな!?」

「そうなるほど追い込まれてるという証拠ですよ。」

桑原と蔵馬は、そう言って飛影の戦いを観ていた。

「アレ?」

二人の話を聞いていた神裂も、それが何かが疑問に思った。

「行くぞ！」

飛影は、両手から炎を発し、そのまま拳で殴り付けた。

「『邪王炎殺煉獄焦』！！」

「！！」

一方通行は、すぐに『反射』に切り替えようとするが、飛影の速度には追いつけず、殴り飛ばされる。

「ガァ！」

すぐに立ち上がり、体勢を立て直す一方通行。

しかし彼の眼はまるで笑っていた。

「・・・・しれェ・・・・・」

「（何だ・・・・この凄まじい・・・・感覚は？）」

「最ッ高ォに面白ェぞォおおおおおおお！」

「！！」

その瞬間、一方通行の背中から噴出するかのように、墨のような漆黒の翼が大きく広げられた。

「悪ィが、こっから先は一方通行だ！　負けても文句は無しだァ！」

「ああ、良いぜ。　久々に楽しめそうだ！！」

こうして、二人の『怪物』の戦いは、第2ラウンドへとなった。

第十一話：怪物同士（後書き）

続きます。

第十二話：ＢＬＡＣＫ＆ａｍｐ；ＷＨＩＴＥ（前書き）

久々に更新します。

第十二話：ＢＬＡＣＫ&ＷＨＩＴＥ

「うおォおおおおおおおおおお！」

「ハァァァァァァァァァァァァァ！」」

一方通行（アクセアレータ）の翼と飛影の炎。

二つの『漆黒』がぶつかり合う。

どちらとも互角・・・まだ勝負は続いていた。

―ＢＬＡＣＫ&ＷＨＩＴＥ―

「何つー戦いしてんだよ！？」

「レベル越えてますね」

驚く桑原とは対照的に蔵馬は呑気にお茶を飲んでいた。

「いや、冷静になりすぎですよ！　アンタもう少し驚けよ！！」

「いや～、そんなオーバーなリアクションが出来ませんので」

「オーバー扱い！？」

余りにも冷静な蔵馬の発言に驚きを隠せない新八であった。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

「ハァァァァァァァァァァ！」

あまりにも激しいを抜く戦いを繰り広げる二人。

「チッ！」

「クソがッ」

体力の消耗の激しくなり、二人は息が上がっていた。

「ハァ・・・・・・・ハァ・・・・・・」

「ハァ・・・・・ハァ・・・・」

一方通行（アクセアレータ）は首の電極に手を当てる。

脳にダメージを負っている彼は能力をフルに使えるのは３０分が限界であるため、好き勝手な戦闘は出来ないのだ。

「（後・・・・１０分ってところかァ・・・・上等だぜ・・・・・）」

そう思いながら飛影を見る。

「（幽助以来だ・・・・此処まで良い勝負が出来たのは・・・・・）」

そう思いながら飛影もニヤリと笑った。

「お互いに・・・・負けられない理由があるみたいだな・・・・・」

「当たり前だろォが・・・・・俺には、負けられない理由があンだよ。　だから・・・・絶対に負けられねェンだよ！」

その瞬間、一方通行の翼が墨のような漆黒から雪のような純白に変わり頭上には同色の輪が浮かんでいたのだった。

「な・・・・ななな何だあの翼はァァァァァァァァ！！」

「凄い・・・・あの姿は・・・・まるで・・・『天使』だ」

一方通行の翼に驚きを隠せなかった桑原と蔵馬。

「あの翼は・・・・・本当に・・・・・『科学サイド』が生み出したモノなんですか！？」

「まるで・・・・魔術を施しているようだ・・・・・・」

神裂もステイルも、その光景に言葉を失くした。

「アレが・・・・一方通行の・・・・・・第一位の真の力だって言うの！？」

「マジかよ！？」

「むぎのが第四位になる程の理由・・・・何か分かった気がする」

無論、『科学サイド』メンバーも驚きを隠せなかった。

「コイツで決めるぜ・・・・・」

「ならば・・・本気を出さんのは失礼のようだな！」

そう言って飛影は剣に妖気を通し、そこに漆黒の炎を召喚する。

「ハァァァァ・・・・『邪王炎殺剣』！！」

「うおォぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

白い翼と黒い炎・・・遂に互いの『切り札』を放った一方通行と飛影。

すれ違い様に反対方向の位置に立つ二人。

「「・・・・・・・・・・・・」」

そして次の瞬間、バタンと互いに倒れたのである。

つまり、引き分けであった。

「ひ・・・・・引き分け！？」

「ひ・・・・・飛影がここまで！？」

「見事な戦いですね」

飛影が倒れた事に驚きを隠せない桑原とぼたんとは違い、冷静に判断する蔵馬。

「あの・・・・・一方通行が・・・・・引き分けで！？」

「アイツ・・・・強すぎだろ！？」

『科学サイド』のメンバーは、一方通行が引き分けになるということに驚きを隠せず、

「本当に彼の翼は科学で生み出された能力なのでしょうか？」

『魔術サイド』の神裂は未だに翼に驚きを隠せなかった。

「兎に角、運びますか。　桑原君」

「おうよ」

すぐにフィールドに向かった蔵馬は飛影、桑原は一方通行を運んだ。

フィールドから出た後、二人からユックリと下ろされる飛影と一方

通行。

隅に座った飛影はすぐさま眠り、ソファに座った一方通行は、

「お疲れ様ってミサカはミサカは缶コーヒーを渡してみたり」

「・・・・・・・・・ありがとな」

打ち止め（ラストオーダー）から渡された缶コーヒーを飲んだのであった。

第十二話：ＢＬＡＣＫ＆ａｍｐ；ＷＨＩＴＥ（後書き）

次回、リクオＶＳ銀時＆ａｍｐ；上条ＶＳ幽助！

第十三話：ぬらりひょんＶＳ白夜叉＆幻想殺しＶＳ霊界探偵（前書き）

久しぶりの投稿！

主人公各のバトルです。

第十三話：ぬらりひょんＶＳ白夜叉＆幻想殺しＶＳ霊界探偵

「もうすぐリクオ様の試合・・・・」

「この勝負、絶対に若が勝つぜ！」

「そうとは限らん」

「あの銀時という男、木刀を使っているとは思えない戦法の持ち主だからな」

などと奴良組のメンバーはモニターを凝視していた。

―ぬらりひょんＶＳ白夜叉＆幻想殺しＶＳ霊界探偵―

～リクオＶＳ銀時～

第２のフィールド・・・『月夜のフィールド』では、変化したリクオと銀時が互いに構えていた。

「ホントに、妖怪になると雰囲気と姿がガラリと変わるなオメェは」

「まあな」

そう言いながら二人は、徐々に足を動かす。

そして急接近し、そのまま剣を振るい上げた。

「んぐ・・・・・・・」

「クッ・・・・・・・」

「「ウオォォォォォォォォォォォォォォォ！！」」

ぶつかり合う刃が火花を散らしだす。

「ウラァァァァ！」

「うおぉぉぉぉ！」

ぬらりひょんの孫と白夜叉。

二人の剣劇はさらに加速した。

「オラぁ！」

「フン！」

銀時が薙ぎ払いをするが、リクオはかわし、逆に斬り上げをするも銀時にかわされる。

「へ、やるじゃねぇか！」

「アンタもな」

競り合いから距離を取った二人。
互いにニヤリと笑いながら刀を構えていた。

～当麻ＶＳ幽助～

第１のフィールド・・・『大地のフィールド』では、上条と幽助が互いに構えていた。

「行くぜ幽助」

「何時でも良いぜ！」

能力者と妖怪。

全く異なる能力を持つ二人は互いに走り出し、

「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」

拳を握りながら思いっきり撃ち込んだ。

バキッという音と共に、互いの顔に相手の拳がめり込んだ。

「ぐっ」

「くっ」

一度よろめくが、すぐに体勢を立て直し、

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

再び拳を突き出した。

再びよろめく二人であったが、すぐさま距離を取った。

「（いっ痛～・・・こんなに強ぇ一撃、生まれて初めてだぞ！）」

科学と魔術の戦いに足を踏み入れた上条にとっては、幽助はそれ以上の強さであり、

「（結構良い一撃じゃねぇか。　コイツは褌締めて掛かんねぇとな）」

妖怪や能力者との戦いを繰り広げた幽助にとっては、上条はその中に入る実力者だと認識していた。

「行くぜ！」

すると幽助は、右手の人差し指を鉄砲のように構え、

「レイガァァァァァァァァン！」

必殺技の『霊丸』を放った。

「喰らうかよ！」

上条はすぐさま右手を突き出し、無効化させた。

「おいおい、まさかと思って試したけど、本当に無効化出来るのかよ」

「まさかそこまで威力の高い技が出せんのかよ」

互いに相手の能力を見て、更に身構える二人。

～控え室～

映像を観ながら今の状況に驚く一同。

「す・・・・スゲェ・・・・・」

「リクオ様・・・楽しんでいるようだ」

「銀さんも楽しそうですよ」

まるで戦いを楽しんでいるリクオと銀時に、奴良組メンバーや万時屋メンバーは驚きを隠せないでいた。

「フン、幽助め……久しぶりに手応えのある奴に会えて楽しんでいやがる」

「みてぇだな」

「彼らしいですね」

浦飯チームメンバーは、楽しんでいる幽助に呆れるつつあるが、

「アイツ……何か楽しんでるわね」

「だろォな。　殺し合いでも何でもねェ、ただの試合だからな」

楽しそうな顔をする上条を観て、苛立ちを見せる御坂に、一方通行（アクセアレータ）は溜め息混じりにそう言った。

だが彼等は知らなかった。

幽助とリクオは、この戦いで新たなる力を得る事を…

第十三話：ぬらりひょんＶＳ白夜叉＆幻想殺しＶＳ霊界探偵（後書き）

次回、魑魅魍魎の斬魄刀

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀（前書き）

リクオの新たな力、遂に登場！

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀

模擬戦が始まる前、リクオは夢の中にいた。

それも、何にもない草原だけの世界に。

「何だ、此処？」

リクオはそう言いながら周りを見渡す。

すると、あるモノに注目する。

「ん？」

それは、雪のように白い着物を身に纏った長い銀髪の女性であった。

「奴良リクオ様ですね？」

「ああ…アンタは？」

訊ねられたリクオは、女性に名前を問うが、

「私ですか？　私の名前は□□□です」

「！！――（聞こえない？）」

まるでノイズが入ったように、女性の名前が遮られた。

「どうやら、私の声が届いていないようですね」

そう言って女性は、ゆっくりと瞼を閉じた。

―魑魅魍魎の斬魄刀―

「――！！」

一瞬、リクオは夢の事で気を取られてしまったが、すぐさま距離を取り、刀を構える

「（何だ？　一瞬誰かと話してたような…）」

一体何が起きたのかが分からないリクオであったが、そんな暇を与えない銀時の猛攻が続く。

「クッ！」

「オラオラオラァ！」

まったくすきを与えない銀時。

「オラァァァァァァァァ！」

さらに強力な一撃を喰らい、リクオは吹き飛んでしまう。

「ガァ！」

吹き飛ばされ、そのまま倒れてしまうリクオ。

「く・・・・あ・・・・・」

「悪ぃなリクオ。　この勝負、俺の勝ちだな」

不適な笑みを見せる銀時。

果たして、リクオは銀時に勝てるのだろうか。

一方の上条ＶＳ幽助戦では…

「（異能を打ち消す能力者か……でも……）」

幽助は、再び走り出し上条に接近する。

「な！？」

その異常を超えたスピードに驚きを隠せない上条。

「（マジかよ！　どんな速さで動いてんだよ！？）」

上条当麻は、今まで戦った相手の中で様々なタイプの人間を見てきた。

世界で２０人しかいない聖人の神裂や最強のレベル５の称号を持つ一方通行（アクセアレータ）のような当時から能力（チカラ）を得た“生まれつきタイプ”、一つ

の技に長けた土御門のような（天才タイプ）、そしてレベル1から自力でレベル5になった御坂のような“努力家タイプ”なら分かる。

しかし、幽助のような“戦いの中で成長するタイプ”の相手は、生まれて初めての出来事である。

幽助は、素早い動きから懐に入り、左手で上条の右手を強く握り、

「取った！」

そのまま右手で、霊丸の構えを取る。

「飛び道具系の技は打ち消せても――」

霊丸を撃とうとしたその時であった。

「！？――（霊丸が……霊丸が撃てない！？　どういう事だよ！？）」

妖気が放てなかったのだ。

幽助の作戦は、“右手を使わせない用に強く握り、その状態で霊丸を放つ”という作戦であったが、右手を握った瞬間に能力（チカラ）を無効化されたのだ。

「（おいおいマジかよ！？　能力者に触れるだけでも無効化出来んのかよ！？　何なんだよコイツ！？）」

焦りを見せた幽助に、上条は右手を振り、幽助の拘束を振り払うと、

「ウオォォォォォォォォォォォォ！」

そのまま右手で幽助を殴り飛ばした。

「う……浦飯がふっ飛ばされた！？」

「能力者自身に触れたら……」

「能力そのものを封じれるのか！？」

上条の能力に、浦飯チームメンバーは驚きを隠せなかった。

「いくら幽助でも、能力の無効化はやばいんじゃ！？」

「で、でもよう、浦飯には身体能力があるじゃねぇか」

「奴が鈍っていなければな」

心配するぼたんに桑原がそう言うが、飛影からそう言われたため冷汗を掻いた。

一方のリクオは、

「クソ・・・・」

「おいおい、さっきまでの威勢は何処いったんですかコノヤロー」

「（これほど差があるたぁ……これが戦闘経験ってヤツか？）」

ボロボロの身体を起こし、刀を構えるリクオ。

「（どうすれば……）」

悩むリクオであったが、

『リクオ様』

「！？」

その時、夢で見ていた長い銀髪の女性が現れた。

「アンタは！？」

『アナタはまだ私の名前を呼んでいない』

「名前！？」

『私の名を呼び、己の眠りし力を解放するのです』

その瞬間、リクオの動きが止まった。

突然の事に驚く銀時は、木刀を構える。

『全ての妖怪を治める百鬼夜行、それを束ねる魑魅魍魎の主に相応しき力……叫べ、我が名を！』

その瞬間、リクオの眠りし力が覚醒し、

「映せ『鬼纏姫（まといひめ）』！」

凄まじい光が放たれた。

「！？」

銀時は、その光景に驚きを隠せなかった。

光が晴れると同時にリクオの手には、三日月を模した鍔に柄には鎖で繋がれた菱形の枠の中に「畏」と描かれた装飾が突いた日本刀が握られていた。

「行くぜ銀時、コイツが俺の新しい力・斬魄刀の『鬼纏姫』だ」

遂に、戦いはヒートアップする。

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀（後書き）

次回、魔族の『畏』

第十五話：魔族の『畏』（前書き）

幽助にも変化が！！

第十五話：魔族の『畏』

斬魄刀『鬼纏姫（まといひめ）』を解放したリクオ。

それを観ていた閃可はニヤリと笑いながらこう言った。

「遂に目覚めたのね、死神の力が」

―魔族の『畏』―

「いくぜ……」

するとリクオの姿は一瞬で消え、

「よう」

「な！？」

いつの間にか銀時の懐にいた。

「ハァッ！」

「グッ！」

リクオの斬撃を受け止めた銀時であったが、

「どうした？　いつの間にか威勢がなくなったぜ？」

「クッ！」

するとリクオは距離を取ると、刀身を地面に刺す。

「『暗器・黒演舞』」

その瞬間、地面から幾つもの武器が出現し、銀時を襲う。

「クソッ！」

かわしきれず、幾つもの傷を追う銀時。

「今のは、拙僧の黒演舞！？」

「何故若が！？」

黒田坊は、自身の技を使うリクオに驚く。

他の奴良組メンバーも、これには驚いた。

「成る程、アレがリクオの斬魄刀の能力か……」

閃可はそう言って分析を行っていた。

リクオ本人は、刀を構え、

「いくぜ」

『明鏡止水』による瞬間移動で、銀時の懐に飛び込み、彼の喉元に刃を突きたてた。

「！？」

コレには銀時も驚きを隠せなかった。

「まだやるか？」

その言葉の意味に銀時は、

「いや、降参だ」

刀を納めたのであった。

坂田銀時ＶＳ奴良リクオ…勝者・奴良リクオ。

一方の上条ＶＳ幽助の戦いは、

「ウオォォォォォォ！」

攻撃にキレが無くなった幽助は、我武者羅に拳を振るった。

上条は、そんな幽助の攻撃をかわしながら攻撃の隙を探っていた。

「クソ！　全然当たらねぇ！！」

徐々に攻撃が鈍りだす幽助に、

「ウオォォォォォォ！」

上条が一撃を叩き付けた。

「浦飯の奴、攻撃にキレが無くなってやがる！」

「上条君の異能の無効化で動揺してるんだ」

「あのバカが！　油断するからこんな事になるんだぞ」

桑原達も驚きを隠せなかった。

「（そろそろか……）」

しかし、閃可は何故か冷静であった。

「（クソッ！　霊丸が効かねぇってことは、霊光波動拳が効かねぇってのと同じじゃねぇか！！）」

徐々に焦りを見せる幽助。
しかし一瞬、彼の体に変化が起きた。
「ん？　何だ？」
まるで煙のようなモノが体から噴き出てきたのだった。
「（まさか……いや、確かめるしかねぇ！！）」
すると幽助はゆっくり目を閉じ、拳を下ろした。
「（何だ……一体？）」
上条本人も窺いだす。
するとその時、
「ウオォォォォォォォォォォォォォ！！」
幽助の体から、煙のようなモノが一気に噴出した。
「な、何だ！？」
動揺を隠せない上条であったが、煙が晴れると同時に
「な！？　嘘だろ！？」
目の前の出来事に驚きを隠せなかった。

そこには、腰まで伸びた髪に隈取のような青い模様、そして肌の色が褐色に近い幽助の姿であった。

「どうやら、これが俺の新しい力みてぇだな」

リクオ達の『百鬼夜行の世界』の妖怪達の持つ力『畏』によって、幽助は新たな力を得たのであった。

「何だよ、それ！？」

驚きを隠せない上条に幽助はこう言った。

「悪い、上条。　上手く右手で消してくれよ」

「え？」

その言葉にキョトンとする上条であったが、

「多分、手加減は出来ねぇぜ！」

「！！」

幽助が放った霊丸を目にして、咄嗟に右手（イマジンブレイカー）で打ち消した。

「ハァ……ハァ……ハァ……トンでもねぇ技だぜ。これ程とはな」

そう言って上条は周囲を見ると、自分のいる位置以外が殆ど吹き飛んでいたのである。

「スゲェな、幽助」

疲れで眠っている幽助に上条はそう言った。

「俺の負けだな、コリャ」

上条当麻ＶＳ浦飯幽助…勝者は幽助となった。

その光景を観ていた浦飯チームのメンバー。

「あの野郎、またトンでもねぇ力ぁ手にしやがって！」

「フッ、彼らしいですね」

「久々に楽しめそうだ」

そんな中閃可は、

「斬魄刀を手にしたリクオと『畏』を手にした幽助……あとは上条だけね」

そう言ってニヤリと笑った。

果たして、その意味とは？

第十五話：魔族の『畏』（後書き）

次回・Wの参上／新たな仲間登場

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場（前書き）

新たな仲間登場です。

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場

模擬戦も終わった翌日、全員が集まった。

「今回の模擬戦でとりあえず判明した事は、リクオと幽助にそして当麻の三人に異世界の能力（チカラ）が使える素質があることだ」

「「「エエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？」」」

コレには幽助、リクオ、そして上条が驚いた。

「いや、当麻は兎も角、幽助とリクオは気付いてなかったのか？」

―Wの参上／新たな仲間登場―

「まずリクオだ。　アナタには死神の能力の一つである『斬魄刀』、そして幽助には『百鬼夜行の世界』の能力『畏(おそれ)』が発動されている」

それを聞いたリクオは自分の腰に差した刀・鬼纏姫(まといひめ)を見る。

幽助もまた、模擬戦での出来事を拳を見ながら思い出す。

「でも、閃可さん？　上条さんは一体どんな素質が備われているのでしょうか？」

上条は手を挙げながら質問すると、閃可はキッパリ答えた。

「仮面ライダー」

「「「「はい？」」」」

その答えに全員がキョトンとなった。

「すみません、もう少し分かり安くお答えできないでしょうか？」

上条がそう言ったその時、

「イッテ～、タイミング良く出て来いって言われても流石に無理があるだろ！」

「翔太郎君、声が聞こえてるよ！」

「いや、もう遅いよ」

「以下同意」

「へ？」

突然の声に全員が振り向いた。

そこにはソフト帽を被ったスーツ姿の青年にラフな格好をした髪をクリップで留めている青年、ポニーテールで動きやすい格好の女性、そして赤い革製のジャケットと赤いズボン姿の青年が現れた。

「ちょっとォォォォォォォォォォォォ！　何イキナリ出てきてるのォォォォォォォォ！？　まだ登場までは早すぎるよ！！」

「いや、そうは言われてもよ」

閃可とソフト帽の青年が口論みじた会話をするも、

「え～と、そちらの方々は何者でしょうか？」

そう言うとソフト帽の青年、クリップの青年、革ジャンの青年、ポニーテール女性の順番で自己紹介が始まった。

「おっと失礼。　俺の名は左翔太郎、探偵だ」

「僕は相棒のフィリップ」

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ」

「私はその妻兼探偵事務所所長の亜紀子です」

それを聞いた上条は、閃可に再び問い出した。

「あの、この方々と俺の素質の関係は？」

その問いに閃可は分かり安く説明をした。

「仮面ライダー、世界を危険に陥れようとする怪人たちに立ち向かう戦士……言わば守護者みたいな存在で、当麻にはその仮面ライダーに変身できる素質があるの」

「マジですか！　上条さんはこれでもヒーローに憧れてました！」

「凄い反応ね」

嬉しそうな反応をする上条に、閃可は呟く。

「それで、どうやって変身するんだ？」

「これよ」

閃可は上条にあるモノを投げ渡した。

「おっと……ん？　ＵＳＢメモリ？」

「後のことは彼等に聞けば分かるわ」

そう言って説明役を翔太郎達に任せた。

「んじゃ、説明するぜ」

何処からか持ち出したホワイトボードにメモリの説明を図で示す翔太郎。

「コイツは『ガイアメモリ』つってな、コイツは一見ＵＳＢメモリのように見えるが、実は地球のあらゆる『記憶』を宿している。そしてこのメモリを使った人間は、超人的能力を持つ怪物・ドーパントに変身するんだ」

「人が怪物に！？」

「まさか閃可、アナタは上条当麻にその怪物に変身しろと！？」

神裂の疑問に翔太郎が答える。

「全く、早とちりなお嬢さんだな。　今から続きを説明するぜ」

そう言って翔太郎はあるモノを取り出す。

「コイツはガイアドライバーって言って、こいつに付いているスロットにメモリを差し込むことで、メモリの力を制御できる代物なんだ」

「そしてこのメモリとドライバーを使って変身して戦う戦士を仮面

ライダーと呼んでいる」
先程渡されたメモリを見ながら、上条は深く考えた。
「じゃあ、俺もその仮面ライダーになれるってことなのか？」
「そう言うことだ」
「しかし仮面ライダーに変身できると言っても、今の君の戦い方じゃドーパントには勝てない筈だ」
フィリップの言葉に、どれだけ強いんだよとドーパントの恐ろしさを想像してしまう上条。
「そこでだ。　上条当麻、俺の下でライダーとしての特訓をしねぇか？」
「特訓？」
「そうだ。　まずは体力勝負で負けるわけにはいかないからね」
ソレを聞いた上条は拳を強く握り締め、
「俺、やります。　いや、やらせてください！」
それを聞いた翔太郎は、サムズアップをする。
「決まりだな！」
「ん？　でも、俺やリクオは誰に付けば良いんだ？」

「あ、そう言えば」
幽助とリクオの疑問に閃可は答えた。
「安心して、既に来てるわ」
「どういー――」
言いかけた幽助であったが、突如気配を察知し、すぐさま振り向いた。
「まさか、気配だけで気付くとはな」
そう言ってバンダナを付けた黒髪に背中に七本の鎌を背負った少年がいた。
その後ろに赤い羽織の中世的な顔の青年、亀のような外見の異形がいた。
「リクオと同じ世界から来た、遠野妖怪・カマイタチのイタクだ」
「同じく、天邪鬼の淡島だ」
「オイラは沼河童の雨造」
遠野妖怪のメンバーが三人現れた。
「話しは聞いている。　お前が浦飯幽助だな？」

「ああ」

「俺はこれからお前の教育係りになる事になった。　ビシビシ鍛えるつもりだから、手は抜かねぇぞ」

「そうしてくれ。　そっちの方が面白ぇからな」

幽助のヤル気満々の表情に奴良組メンバーは若干引いた。

「若！」

すると、黒いフードを被った２ｍもある長身に刀を所持した青年が現れる。

「猩影（君）！？」

それは奴良組幹部の一人・猩影であった。

「話しは聞いてます、俺も若や皆に付いて行きますぜ」

それを聞いて、リクオは答える。

「頼むよ、猩影君」

「はい！」

すると閃可は、何かを思い出したようにこう言った。

「リクオは暫らく待ってくれる？」

「え？　僕は別に良いですけど」

「よし、じゃあ特訓は明日行うわよ」

しして翌日、上条と幽助そしてリクオの特訓が行われるのであった。

すると銀時は、ふと疑問に思った。

「なあ、俺にも素質ってあるのか？」

それを聞いた閃可は、サラッとこう言った。

「特に無い」

「ガァァァァァァン！」

思いっきり落ち込んだ銀時であった。

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場（後書き）

次回、三人の特訓

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9297t/

次元の破壊者～繋がる世界の絆～

2011年10月12日12時56分発行